

国立がん研究センターは2018年末、全国のがん患者が亡くなる前の実態を調査した結果を公表しました。

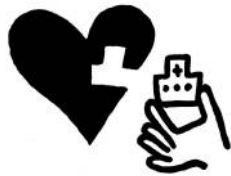
終末期のがん患者を直接調査するのは難しいため、実際には患者に寄り添っていた家族から聞き取る「遺族調査」が行われました。全国的な遺族調査は日本初となります。

調査は昨年の2〜3月に郵送法で行われ、がん患者の遺族1630人から回答がありました。「亡くなった場所で受けた医療に満足している」と回答した割合は全体で約76%、ホスピスや緩和ケア病棟で亡くなった場合に限れば約82%でした。

しかし、死亡前の1カ月間を痛みがある状態で過ごす

## がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

# 緩和ケア、日本は発展途上

高いなど、みとりに熱心な遺族からの回答が多いように思えます。終末期の苦痛緩和の実態は今回の数字以上に悪いと思われま

す。わが国の緩和ケアはまだまだ発展途上ですが、緩和ケアは終末期だけに必要なものではありません。実際にがんの手術を受けた患者のほとんどが術後の痛みがつかつたと言

います。患者は医療者につらさをきちんと伝えること、医師も患者の訴えに耳を傾けることが必要でしょう。

私が経験したぼうこうがんの内視鏡切除でも、麻酔が切

れると下腹部に激しい痛みを感じました。痛み止めの処方をお願いして楽になりましたが、この治療を受ける全員に痛み止めの処方が必要だと感じました。痛みを我慢してもプラスは全くありませんし、症状は本人しか分かりませんので、遠慮は不要です。

私は東京大病院の放射線治療の責任者ですが、03年から14年まで緩和ケア診療部長を兼任してきました。しかし、ナースの仕事の重要性など、いざ自分が患者になってみると自分からしないこともたくさんありました。

この経験を今後の医療や啓発活動に生かしていきたいと思っています。

(東京大病院准教授)